

節度失う政治 「裏」が表に

北大スラブ・ユーラシア研究センターの宇山智彦教授（中央アジア・旧ソ連地域研究）は、2014年のクリミア半島併合以降のロシアについて「節度を失ってきた」とみる。プーチン氏の変化について聞いた。

——ウクライナ国境へのロシア軍展開の狙いは。

「プーチン大統領はイメージと裏腹に感情的な政治家です。欧米へのうらみや怒りを年々募らせている。不安定な状況を作り出し、得られるものを得ようということだと思います」

——プーチン氏は2000年の政権発足直後は欧米との協調姿勢を見せました。

「01年の米中樞同時テロ後には米軍の物資輸送に便宜を図り、（勢力圏とみなす）中央アジアのキルギス、ウズベキスタンの基地を米軍が使用するのを容認しました。対米不信に傾くのは、03年のイラク戦争から。北大西洋条約機構（NATO）の東方拡大への批判が激しくなるのは、07年のミュンヘン演説のころからです。ロシアに迫る拡大は、実際には04年のバルト3国加盟で終わっています。脅威というより、国家の威信の問題です。自国の勢力圏にNATOが来るのは、容認できない。しかし、拡大は加盟したい国の意向によります。小国の主権をロシアは軽視しています」

——プーチン政権はグルジア（ジョージア）、ウクライナなどで起きた「カラー革命」の背後に米国の存在があると主張します。

「米国など外国勢力による陰謀の脅威を特に強調するようになるのは、12年にプーチン氏が大統領職に復帰してからです」

——14年のクリミア半島併合の際、後に認めるロシア部隊の存在を当初は否定するなど、一部に虚偽と受け取れる発言も交じるようになりました。

「プーチン氏は、ソ連の秘密警察、KGBの出身です。ソ連時代は共産党が表で、裏の存在だった。今はKGBの見方で政治を動かしている印象です。裏が表となる赤裸々な手法が目立ってきたのは、対外的にはプーチン氏の大統領復帰以降。内政では2000年の就任段階からあり、（野党政治家やジャーナリスト排除という）『灰色』はだんだん濃くなってきたと捉えられます」

——プーチン氏の被害感情はソ連崩壊にも及びます。

「ソ連が崩壊したのは、体制を保てなくなったことと、ロシア共和国（当時）のエリツィン大統領とゴルバチョフ・ソ連大統領の権力争いから。エリツィン氏主導で話し合っただけで決めたのですから、ロシアがソ連を解体したのです」

（2022年1月24日、藤盛一朗北海道新聞編集委員によるインタビュー。

『北海道新聞』2022年2月12日 [サタデーどうしん] 掲載）